

2025年12月

課題本 『掃除婦のための手引き書 ルシア・ベルリン作品集』

ルシア・ベルリン/著 岸本佐知子/訳 講談社 2022年

◆◆◆11月の読書会から

先月の『二番目の悪者』の感想文を読んでそれぞれ感じたことを共有しました。吉川先生がおっしゃった「まず作者の主張を考える。そのあと、それについて自分でどう考えるか」という言葉が印象に残りました。

今月の課題本は『掃除婦のための手引き書』、逝去後に出版された短編集からよりすぐりの24篇が収録された本です。作者は多くの作家に影響を与えながらも、生前は一部にその名を知られるのみだったルシア・ベルリンです。

(文責:森下)

2025年12月 竹原読書会 『掃除婦のための手引き書』

(ルシア・ベルリン/著 岸本佐知子/訳 講談社 2019 文庫 2022)

吉川五百枝

「～取扱説明書」という言い方が流行のようにも思えて、今回の題の「手引き書」という訳は、その時流の一つかと思ったが、原題を見ると『A MANUAL FOR CLEANING WOMEN』と、ちゃんと原題がマニュアルとなって居るので安心した。流行りの言い方は、すぐ手垢が付くのだ。

24篇の短編集。読み始めるとすぐ、ヒリヒリとしたものを感じた。

ちょうど、大根をおろし器にかけ、“おろし大根”を作っているときの空気のような。

自分が大根なのか、おろし器なのか、おろしている作業中の人物なのか。どれが私なのかよく解らないけれど、これらの短編集は、辛みの強い“おろし大根”を連想させた。身を擦られる大根。他のせいで恨みもないのに大根を擦る器具。大根の身の痛さなど感じることもない善意の擦り手。これらの共働でなりたつ“大根おろし”は、ヒリヒリとした味に出来上がる。

いくつかの短編を読み始めて、作者のことが知りたくなった。これまでどんな原体験があったのか、どこでどう暮らして居たのだろうか。しかし、「どこで」と言うのは私には理解しがたい回答ばかりだった。国名や地名が出ていても、まったくその雰囲気知らない。読んでも解らない事が多いのはどの小説でも当たり前だが、この短編集では場所が重要なピースとなる。だから、まるでファンタジーを読むように、ただ描写される言葉のままに、中心人物の感性にそって想像するしかなかった。ヒリヒリした感覚が、多面体の玉を繋ぐ糸のように24篇をひとまとめにしている。

作者の生い立ちは、最後の「訳者あとがき」によって知った。身も心も転々とした作者の実人生が作品の背景となっている。それを、虚の小説としても成り立たせているのは、作品の言葉が、生々しく迫る表現力のせいだと思う。

【星と聖人】うちの隣のコテージに住むハンサムな精神科医。幸せだった私だが、彼に見られた無残な猫の残虐を弁明する暇が無かった。物心ついてからずっとそうだ。私は、尼さんになることに決めていたが、周囲の勘違いから途切れた。プロテスタントだが、カトリックになりたい。母は反対だ。学校では皆が、私をシスター・セシリアのエコヒイキだと憎む。目をかけてもらえる彼女を、私はうっかりつきとばした。暴力をふるったかどで、わたしは、退学になった。ああ、勘違いや蔑みがつきまとう。

【掃除婦のための手引き書】ミセス・ジェセルは何でも忘れる。夫に愛人がいることも忘れる。〈掃除婦はなんでも知っている〉〈掃除婦が物を盗むのは本当だ。〉わたしは、睡眠薬だけ盗む。(掃除婦たちへのアドバイス:)というのがあって、奥様からものをもらう作法や、友だちのところで働くな、などのアドバイスが挿入される。皮肉交じりだが:手引き書:になっているので、表題がやっと出てきたわけだ。今は何軒の掃除婦をしているのか、姓が出てきても数えられない。避けるべき勤務先がアドバイスされる。ユダヤ人と黒人の家で働くのが一番だという。この仕事を尊重しているからだ。ふっと語られる自分のこと。一緒に暮らしたパートナーのターは死んだ。わたしはまだ死にたくない。

【ファントム・ペイン】わたしは、アラスカで生まれたルー 5 才。モンタナの鉱山のでっぺんハンコックの山小屋は、見渡す限りぜんぶ青空。養護施設の父の頭があやしくなって、鉱山の話ばかりする。アリゾナの鉱山では 8 才。鹿、レイヨウ、プーマまですぐ傍に来た。父が一度だけ愛していると言ってくれた。父は母のことを知りたがったが、妄想の中で勝手に母を殺した。妄想や幻覚が続き、わたしのこともわからなくなる。それでも父に畏怖がなくなり絆を感じて身に触れるようになった。いつか父がほめてくれるのではないかと思って会いに行った。父の居る施設の遠出の催しで、父の車椅子が暴走を始める。ぼんやり見ていたが、たばこを投げ捨ててつかまえた。

【喪の仕事】わたしは、いろいろな事を語りかけるから家が好き。セントラル不動産で働く。住人が死んだ家の掃除で、気が滅入る。あっという間にすべてが済んでしまうのがかなしい。うんと年寄りの黒人が死亡した。娘も息子もタフで長身で目を引くほどの美男美女。それぞれ要るものだけ持ち出し、がらんと静かな家。教会などが残る家具をそれぞれ引き取る。死には、癒やしの力があり、許す事を教える。孤独死はいやだとも教えるが、垣根が緩み思い出もみんな出ていく。

【苦しみの殿堂】妹サリーは、ガンでもうすぐ死ぬ。アメリカでは、だんだん美しい物や正しいものを感じられなくなって行くようでおそれている。私は暗い。死や暴力とも近い。ママが昔、家と呼んでいたのは地獄だった。ママの思い出がよみがえる。泣く妹サリーは、まったくのひとりぼっち。昔のママがそうだったように。死には手引き書がない。

【さあ土曜日だ】刑務所にいる白人のおれ。おれはものを書くのが好き。うまれつき力のあるCDを読書に目覚めさせた。刑務所の文章教室で、幸せを冷凍保存するCD。冷凍は、いつでも戻せる。CDがクラスメイトに声をかける。「こりやすげーな。もっと聞かせてくれよ」と。自分の声に耳を傾けてもらうことの大事さを教室で明らかにするCD。だが、CDは出所後すぐ殺された。

賛辞のような【物語こそがすべて】 文:リディア・デイヴィス

ルシア・ベルリンの作品は〈触れるとビリッ、パチッと来る〉とリディア・デイヴィスは書く。今

回、読み手の私は、「ヒリヒリ」と感じた。理屈は後から考えるとして、この作品が、まず感覚を刺激すると指摘されて、「ね、そうでしょ」と言いたかった。

単語が凄まじい。書き文字としてはあまり使わない単語を、訳者は意識してぞんざいな訳にする。それでいて訳者は、ロシアの文章は、ゴミ捨て場を〈野の花について書くときと同じ詩情にあふれている〉とも言う。ロシア・ベルリンは、汚れた街も、野の花も、同列の如く書く。作者の実人生を知ることは、作品理解を容易にはするが、小説は「虚」である事にかわりはない。短編であっても、一語一語を選び抜き、構成し直して世に出すのだ。

私の書くことにしている 2 頁分の中に収まる数篇を選んでみた。全体を、ヒリヒリした気分と感じたが、当事者なら擦りおろされる大根側だと思う。しかし、この作家は、そんなことなど気にしないだろう。“おろし大根”のヒリヒリ感は、時間をおけば抜けるのだ。ロシアは、時間も空間も、こだわることはしない。その時の感性のままに、涙を流し、お酒を飲み、したたかに生活する。半自伝的ながら、冷めた目は、幅広くて物語作家の目だ。私には遠い経験で、その起伏に読み疲れた。

『掃除婦のための手引き書』を読んで

◆【 ZK 】

掃除が苦手な私はこの本を読んだら良いことがあると思ってましたが、全然関係がないものでした。

南アメリカあたりは薬物とか犯罪が多く経済も安定していません。また、日本とは文化の背景が全く違い、共感や理解がしにくい内容でした。

嫌なことにぶつかる薬物やアルコールにはしったり、人の物を盗むのもお茶の子さいさいみたいにハチャメチャな生き方で短絡的な人ばかりになっている。

でもニュースとかをきくと政治とか宗教に希望を求めてバイタリティー溢れる面もある。日本人は政治や宗教の話にはあまり関心がないし生活がある程度満たされているのかもしれないと思います。

確かに人間は楽しみが必要です。生活するために働いていかなければならないので両立は大切です。

読みにくかったけど、あとがきを読むと作者の自伝みたいなものとわかりました。

さあ、土曜日だというお話では刑務所の中のみんなの講習が開かれており、自発的に自分を向上させるきっかけ作りがなされていた。自分で考えて自分から動くように促している。

他のお話では社会活動として障害のある人へボランティアをしようとする葛藤もかかっていた。

どうしたら生活がよくなるか考えている人達や生き方も描かれていました。

目に見えない心の糧をえることは大切です。

◆【 JM 】

安直な私は題名を見て「これを読んだら少しは掃除のスキルが上がるかしら」くらいに思っていた。よく考えれば読書会の課題本にそういう実用書が選ばれるはずはないのに。

読み始める前に何人かの方に「難しくてよく分からない」「読むのがしんどい」と聞いていたので、「最後まで読み切るぞ」と気持ちを奮い立たせて読み始めた。

読み始めると私小説短編集だった。もちろん全てがノンフィクションではないだろうが、読んでいくうちに 1 人の女性の人生が浮かび上がってくる。凄絶と言えるような家庭環境で生まれ育ち、親の仕事で各地を転々とし、貧富の差の大きい生活も経験し、必死で生きてきた女性だ。自身もアルコールに苦しみ、きっとこの人は書くことで生きてこられたのだろうなと思った。

凄まじい人生の中にあって、この人の目は暖かい。コインランドリーで出会うインディアンの老人にも、底辺で暮らす人々にも、差別や憐憫といった感情はない。自身の生い立ちや生活についても、恨みや憎しみといった感情は出てこない。悲惨な生活を描いていても、どこか乾いた明るい風が吹いている。

強いから耐えられたのか、弱いからアルコールに逃げたのか…それらも含めて、書くことによって昇華し、だからこそ書かざるを得なかったのだろうか。

◆【 T 】

短編の一つ一つが独立しているようではあるが、作者ルシア・ベルリンの人生経験が反映され、それぞれが繋がっている作品になっている。ほとんどの主人公は〈わたし〉で、三つの短編は〈わたし〉以外が主人公になっているが彼女を表したような作品だ。

【さあ土曜日だ】は、おれ(チャズ)が主人公になる刑務所の中の話。唯一彼女が主人公になっていない作品で、読んだとき少し変わった作品だなと思った。ルシア・ベルリンらしき人物は、彼らに文章を教えているベヴィンズ先生だと思われる。

この刑務所ではコンピューターや自動車整備や印刷の技術が学べるようになっていて、チャズたちは文章創作を学んでいる。他の技術は社会に出た時の就労に実際に役立つものだが、文章創作は何を目的にしているのだろうか？自分を振り返り見つめなおす？周りを見るとき視野を広めて公平に判断できるようにする？日本にもこんな創作クラスはあるのだろうか？など色々と興味がわいた。

以前読書会で読んだ『プリズン・ブック・クラブ』を思い出した。刑務所の中で行われた読書会についての話で、受刑者たちが熱心に本を読み、時には斬新な意見を出し合っていて、読書会の喜びはどこでも感じることができるんだなって思った記憶がある。

ここでのチャズと CD もまた読書で結びついていた。初めはチャズが CD に読書に目覚めさせた。その時のことを、「奴が初めて言葉と恋に落ちたのはスティーブン・クレーンの『オープン・ボート』だった。」と書いてある。きっと二人の心が触れ合った瞬間だったんだろう。それから沢山の本を読んだと思われる。次に会ったときは CD がチャズにたくさんの作家を教えるようになっていた。

またチャズは毎晩房で文章を書き、書いたものを同室の相手に読んで聞かせたり、交代で色々な作品を朗読したりしたそうだ。すごいなあ。こんな刑務所があるなんて。彼らに書きたいという意欲を湧き起こさせる先生も素晴らしいが、それにこたえて実際に書ける彼らもはすごい。

ベヴィンズ先生が課題を出し、その課題で各々が文章を書きみんなの前で読み上げる。それを議論する。中にはシェイクスピアのソネットを暗唱する者もいる。

チャズはここで GFD(高卒資格)を取った。生育の途中で適切に教育を受けていたら彼らの人生は異なったものになったのだろうと思わずにはいられない。

最後にこの話がチャズによって書かれた話で、CD が刑務所を出た翌日に殺されることが分かる。

◆ 【 KH 】

ほとんど困り果てている。ものすごい大当たり。選りに選って、今年の当番の本は『掃除婦のための手引書』表紙の女性はアメリカの映画女優のように美しい。

課題の短編集は、どうにか読み終えたが、正直に記すと、「遠い異国の物語。私は、アメリカに生まれなくてよかった…」なんとも陳腐で恥ずかしい感想しか浮かんでこなかった。筆致がドライだとか、波乱万丈の人生の一コマをさらりと、的確に表現する素晴らしい筆力…ねえ。確かにその通りだ。この短編集で感想文を書くとしたら、【さあ土曜日だ】サンフランシスコ郡刑務所などで創作を教えていたという経歴から、どこかの刑務所のクラスでの一コマ。ならず者だらけの生徒と教師が“お互いを全面的に信頼しあえる、そういうクラスにあたしはしたいの”まさにルシア・ベルリンが望んでいたことだろう。そして、フィクションの小説を読んでいるにもかかわらず、目の前に彼らのやり取りが実際の映像を見るようにありありと浮かんでくる、この筆力・表現力は凄いと思った。頭に浮かんだワンショット、それも限りなくリアルな画を、無駄のない文章で表現したらこうなるというお手本。古道具屋の品物をさして「ここにある品物は全て死者の形見だということに注目して、とベヴィンズ先生が言った。ショーウィンドウは夕日に照らされている。出てくる全てのイメージが人生と愛のはかなさを物語っている。～」モノクロームの写真の一枚一枚をパツパツとつなぎ合わせたかのような、無駄ない表現力。筆者に見えている世界に読者をぐいっと引き込んでしまう、そんな力を持った作家だと思った。「文章を書く時、よく『本当のことを書きなさい』なんていうでしょ。でもね、ほんとは嘘を書くほうが難しいの。」その通りかもしれない。くたびれた、古い道具の向こうに持ち主だった“ひと”を透かし見ることができる能力。人への暖かい愛、人への信頼が底に流れていなければそうはいかない。はじめ拒絶、気づいてみれば彼女の言葉に感電し、魅了されかかっている自分がある。

◆【MM】

今月の課題本は読むのに苦労した。結局最後まで読まずに会に参加することになってしまった。作者や課題本について何も調べずに読んでしまって、作品集なのでそれぞれが独立した作品ということも理解できず「こんなにとっ散らかってこれは何のお話？」と迷ったままだった。「読書会の中では面白く感じた人もいるだろうからその人のお話を聞こう」という気持ちで参加した。

課題本を楽しめた人の話を聞いてみると、この本を読んでみたいと思えるから不思議だ。巻末の解説や訳者あとがきにも読み進める助けにあることが書いてあって、最後まで読んで読書会に参加すればよかったと反省した。当番がまとめてくれた資料も課題本を理解するのに大事なもののひとつになることを改めて感じた。

今回、私が改めて読んでみたのは会でも話題にのぼった【さあ土曜日だ】とその前後の【沈黙】【あとちょっとだけ】、リディア・デイヴィスの解説と訳者あとがきである。この作品集が私小説であること、作者がさまざまな職業を経験していることを踏まえて読んだ。私が最初とっ散らかっていると感じてしまったそれぞれの章は作者の経験に基づいており、独立しているけれどそのどれもが作者とつながっていると実感できて興味深く読めた。私はそれぞれの章同士をつなぐつながりを勝手に求めていたので理解できずにいたのだ。そして、落ち着いて読んでみると、妹のサリーなど共通する登場人物にも気づいて作品を楽しめるようになった。【沈黙】については初めて親友と言える人とのつながりと断絶が描かれ、作者の母親や妹への思い、叔父の存在のありがたみと最後に触れたアルコール中毒を思わせる事故などが私にせまってきた。また、性を思わせる描写など最初は「なんだ、下品な」と感じてしまったが、これももしかしたら作者の実体験かもしれない？！と思うといろいろ考えずにはいられない。

さまざまな体験をしてきた作者が物語にそれを落とし込もうとすると短編の作品集になるのもうなずけた。職業も多岐にわたっているし、生活レベルも時期によって雲泥の差だ。これは一つの物語として書くことは難しいだろう。読者の私は作者の人生を覗き見するような感覚になった。アルコール中毒の最中と克服した後の話でも別人のように感じる。物語を書くことでいろいろな想いが昇華できたのかな、とも考えたりした。

読書会で話にあがった「ベルリンはアメリカで最も守られている秘密の一つ」「アメリカ文学会最後の秘密」についても自分なりに考えてみた。存命中に正当に評価される機会に恵まれなかったことなのか、他民族からくる多様な価値観や境遇、ドラッグやアルコール依存、暴力などの社会問題について作者ほど切り込んで描く人がいなかったからなのか…。アメリカ文学について詳しくないのでこれについてもまだ知ることが多そうだ。